

外国人労働者の移入に伴い、公立小学校では日本語習得が充分ではない日本語学習者 (JLL : Japanese Language Learner) 児童の転入学が増加し、児童の言語環境が複雑化している。これまでの研究では、日本生まれ、又は低年齢で来日した児童は、母語話者児童であれば誰でも知っている身近な単語が日本語と母語の双方で分からないこと、語彙力が弱いこと、漢字習得が困難であること、学力に遅れのある児童が多いこと、母語話者との語彙力の差は年齢を経ても縮まらないことなどが指摘されている。

また、日本語の語彙力には音声情報と漢字知識の双方が必要である。日本語の面白さでもある漢字表記を駆使した語彙の広がり、JLL 児童の語彙力伸長の大きな壁になっているのと考えられる。そこで本研究では JLL 児童の音声言語と漢字表記に関わる語彙力の実態についてデータを基に「可視化」することを目的とした調査を実施した。

調査には『標準抽象語理解力検査』を用い抽象的な意味を表し漢字 2 語で表記される 45 単語について、音声言語として理解できるか (聴覚課題)、漢字表記を見て意味が理解できるか (視覚課題)、漢字表記が読めるか (音読課題) を調べた。尚、聴覚課題と視覚課題では 6 枚の絵の中から正答を選ぶ。音読課題には選択肢はない。協力者は非漢字圏言語を母語とする日本生まれ、又は幼少期に来日した JLL 児童 4~6 年生 36 名 (JLL 群) と母語話者児童 (L1 群) 25 名である。協力者本人と保護者には事前に調査の目的を説明し個人情報の保護に関する誓約書を交わした。調査は全て個別に行った。

調査の結果、3 課題の全てで JLL 群の平均点は L1 群の平均点に比べて有意に低かった。両群の上位グループでは意味が分からない単語でも読める場合があり、漢字の形態と読みの知識がある程度積み上がると未知語の音読が可能であることが示された。JLL 群下位グループには漢字単語の音読がほとんどできない児童が目立った。また、JLL 児童は語彙習得において文脈依存型の解釈をする傾向があること、そのため語意の精緻化が進みにくいことが示唆された。加えて、JLL 群下位グループの児童は漢字の形態・意味・音の関係が整理できていないだけでなく、個々の単語の音を正確に認識、あるいは分析できていない可能性も示唆された。従って、音声と漢字表記が相互に影響している日本語の語彙力の伸長には漢字の知識だけではなく、単語の音の連鎖を分析的に認識する日本語の音韻意識も影響しているのではないかと考えられる。この点については更なる調査が必要である。

主要参考文献

西川・青木他(2015)「日本生まれ・育ちの JSL の子ども達の日本語力ー和語動詞の産出におけるモノリンガルとの差異ー」『日本語教育』(160),64-78.

宇野・春原・金子他(2002)『標準抽象語理解力検査』インテルナ出版：2011 版